

教育目標・学校経営方針

教育目標	児童生徒の発達や特性を考慮し、一人一人のニーズに応じた教育を通して、社会で自立し、健康で心豊かに生きる人間を育む。
学校経営方針	・子どもを中心に据え、一人一人の実態とニーズに応じた教育を行う。
	・安全で安心して学べる学校環境づくりに努める。
	・教職員同士が協力し明るく意欲あふれた学校づくりに努める。
	・学校・家庭・地域が一体となった学校づくりに努める。

評価基準 A：十分達成できた B：おおむね達成できた C：やや不十分、一部改善が必要 D：改善が必要

重点目標	重点課題（評価項目）	具体的な取組（評価の観点）	評価	取組状況	今後の取組（改善策）
1 学習活動の充実 ・わかる授業を展開するため、教科等の教材開発や研修に努めるとともに、将来を見据えた指導を進め、体験的な学習を充実させ、児童生徒の習得レベルの向上を図る	(1) 主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善	・「主体的」「対話的」「深い学び」の視点を明確にした指導案を作成し、研究授業を行う。 ・授業研究会では、「主体的」「対話的」「深い学び」の視点での授業内容を検討し改善を図る。	B	・今年度は、各グループの研究テーマに合わせて、「主体的」「対話的」「深い学び」の視点を明確にした研究授業を行った。院内学級やあすなるグループについては、「重度重複障害を有している児童生徒の『主体的』『対話的』『深い学び』とは」どういうことかを教師間で話し合い明確にして指導案を作成できた。 ・授業研究会は、「主体的」「対話的」「深い学び」の視点でそれぞれの教師が児童生徒の実態を踏まえて工夫した内容について話し合う機会となった。一人一人の児童生徒に応じた指導の工夫を今後の授業に生かそうとしている。	・「知識及び技能」が習得されること、「思考力、判断力、表現等」を育成すること、「学びに向かう力、人間性等」を涵養することが偏りなく実現されるよう、単元や題材などの内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向け、授業検討会で共有した情報を生かし、授業改善に取り入れていくことを促進する。
	(2) ICT機器の有効な活用	・一人一人の児童生徒が主体的に取り組むことのできるICT機器の活用方法を探り、学習指導に活かす。（視線入力、遠隔操作システムによる授業、アプリケーションソフトウェアの活用、インターネットの活用等） ・ICT機器を有効に活用し、児童生徒同士のやりとりを深める。（動画作成、動画視聴、遠隔操作システムによる校内での学習交流等）	B	・ICTを活用した学習活動の展開やAIDリルの導入等について、新たな研修機会を設け、実際の授業場面で生かせるような基盤作りをしてきた。ただし、それを実践に移す段階では、教員間で格差が生じ、学校全体に浸透させるには、もう少し時間が必要である。 ・集会活動等での様子を、参加できなかった児童生徒へライブ配信したり、撮影した動画を視聴させる等して、ICT機器を利用した。時間の制約等もあり、一方的なコミュニケーションに終始しがちである。	・教員自身が端末に触れる機会を多くもち、操作に慣れていく自助努力の側面と、引き続き研修の機会等を設定し、取り組みへのヒントを提供するといった環境整備の側面とを組み合わせて、ICT機器の活用を促進する。 ・活動内容に応じて、児童生徒が相互にやりとりする場面を短時間でも設定し、双方の参加意識が高まるよう工夫した活動展開を心掛ける。
	(3) 効果的な指導につながる評価の工夫	〈通常の学級〉 ・通信表の学習のめあての作成（高等部）及び評価方法の工夫（小学部・中学部）をする。 〈重複障害学級 課程1〉 ・合わせた指導における各教科の「指導内容一覧」を児童生徒一人一人について作成し、個別の指導計画に役立てる。（系統性、学びの連続性、3観点）	B	・令和4年度から新学習指導要領の実施に向けて、高等部の通常の学級における通信表のめあてを作成することができた。また、小学部、中学部の通常の学級においても、新学習指導要領に基づく指導と評価の一体化のための学習評価を教科担任の協力を得て取り組んでいるが、教科によって評価基準の扱いが異なる様子が見られる。 ・重複障害学級課程1については、合わせた指導における各教科の「指導内容一覧」に児童生徒一人一人について明確にした。「学びの連続性」を踏まえた個別の指導計画の目標作成に取り組んでいる。	・通信表のめあてについては、他校の取り組みについて情報を収集しさらに検討していく。また、評価方法の工夫については、各教科における評価基準を見直し、教科間で話し合い評価を行っていく。 ・引き継ぎをしっかりと行い、「学びの連続性」を踏まえて作成した個別の指導計画について、PDCAサイクルで指導を行っていく。

重点目標	重点課題（評価項目）	具体的な取組（評価の観点）	評価	取組状況	今後の取組（改善策）
2 安全・安心 ・児童生徒が心身ともに安全で安心して学べる学校環境づくりに向け、施設・設備の整備点検、各種マニュアルの点検を行い、実践的な指導を推進する	(1)心身ともに健康的な児童生徒の育成	・人権・道徳目標に沿った指導を行い、自他を認めることのできる気持ちを育てる。 ・学校生活チェックカードやお話しカードの活用、個別懇談等の実施により児童生徒の状態を捉え、安心して通える学校づくりに努める。	A	・「人権・道徳目標」を念頭においた指導を、児童生徒の実態に応じて、学校生活の様々な場面で行うことができた。コミュニティ活動では学年や障害の違いによらず、互いに支え合いながら活動を楽しむ場面が多く見られた。 ・個別懇談や、送迎時の情報共有、日々の児童生徒との関わりが丁寧に行われているため、安心感へつなげることができたと思われる。	・個々が果たす役割を与え、認め合うことのできる環境を設定する。 ・担任と保護者、担任と児童生徒の関係については、今後も良好な関係づくりに努める。児童生徒の抱える問題等に関して、教育相談の活用や、コーディネート委員会の開催等で組織的に対応し、早期解決につなげる。
	(2)感染症予防及び安全で衛生的な校内環境作りの推進	・病院や家庭と連携し、病院との合同避難訓練、校内での引き渡し訓練等を実施してより安全な避難方法を検討する。 ・消毒、検温など新型コロナウイルス感染症をはじめとした感染症への対策を周知・徹底し、児童生徒への指導に当たる。	A	・定期的な避難訓練や引き渡し訓練を実施し、避難方法の検討を行うことができた。また、緊急時訓練や避難訓練等では、外来への受け入れ確認や災害発生連絡の確認で連携することができた。 ・手指消毒や検温、換気、3密を避ける等の実施の徹底をし、各教室で児童生徒の指導に当たった。	・新型コロナウイルス感染症の状況を鑑みながら、緊急時訓練や避難訓練等でよりスムーズな避難方法を検討していく。 ・常に感染症の状況を把握し、引き続き、感染症への対策を周知・徹底していく。
	(3)安全・安心に関わるマニュアルの見直しと危機管理体制の整備	・学校安全計画や危機管理マニュアルを見直し、マニュアルについて教職員に周知する。 ・医療的ケア検討委員対象研修、心肺蘇生法研修、防災訓練等の研修会を実施し、安全・安心に必要な知識・技能の習得を目指す。	A	・年度初めに安全計画、マニュアルについて全教職員に周知したほか、校内での危機管理に関する研修において危機管理マニュアルを活用することで周知・見直しをした。 ・研修会を実施し、その中で新しい知識の習得、実際に起きたときに近い場面での動きの検討、必要な手技の訓練等を行った。	・今後も計画・マニュアルを検討し見直すことでよりよく整備していく。 ・災害・事故等への対応の検討、知識・技能の習得の情報を発信していく。 ・安全・安心に必要な知識は常に更新されているので、今後も継続して実施し、知識・技能の習得を目指す。
3 意欲向上 ・明るく意欲にあふれた学校づくりに向け、児童生徒を中心に据えた指導、教職員間の協働体制の確立、専門性の向上に努める	(1)学習意欲や業務の効率化につながる環境の整備	・タブレットパソコン等の情報機器を円滑に授業で使えるように整備を進める。 ・学部会、教科会において学期1回の教材の整理・確認を行う。教材の情報を共有し、学習に活用しやすい環境を整える。	B	・係を中心に特にタブレットPCの整備を進め、授業での活用も進んだと考える。物品教材については、各教科会で学期ごとに整備を行い、データ管理をしたが、今年度は新しい教材の購入が少なく教科内での確認のみで、全体での情報共有が少なかった。タブレットPCの導入でアプリ等のデジタル教材の活用が進んでいるため、物品教材の活用が少なくなっている現状もある。	・今後は、デジタル教材の活用状況についても情報の共有を更に進めていき、授業等で活発に活用できるように整備していく。 ・校務についても新しいシステムが導入され、次年度から正式に運用となる見込みのため、年度内にマニュアルの作成や職員への伝達を行い、円滑に移行できるようにする。
	(2)授業力向上を目指した研修への取組	・ICT機器を有効的に使用できるようにICT機器の使い方や活用事例等の研修を実施する。 ・教員のニーズに応じた研修会の企画・研修情報の提供を行い、主体的な研修への取組を図る。	A	・教員からのアンケートを基に、年間を通して様々な研修を企画し実施した。特にICT機器の活用については、授業等で積極的に活用することが求められていることから、研修の回数を多くしたり、アプリの紹介を随時行ったりした。研修アンケートからは「役に立った」という意見も多く聞かれ、実際の授業や指導の活用につながっている。	・ICTの活用については、導入や活用が急速に進んだことで、ICTに不得手な教員にとっては不安や負担感を感じているところもみられるため、個々のスキルや個別に必要な内容をICT支援員に相談できるようなシステムを作り、教員の負担感や不安の軽減を図っていく。他の研修についても、引き続き先生方の要望に応じたものを企画・実施し、情報の提供・基礎的な知識の習得を図っていく。

重点目標	重点課題（評価項目）	具体的な取組（評価の観点）	評価	取組状況	今後の取組（改善策）
4 地域との連携 ・特別支援学校のもつセンター的機能をより強く発揮し、保護者・地域・学校の連携強化を図りながら、交流活動、進路支援などを充実させ、地域に愛される学校を目指す	(1) 地域のセンター的役割の取組の強化	・ニーズに応じた情報発信に努めるとともに、HP・たより等における内容の充実や活用を図る。 ・校内外の諸課題への対応や支援に組織的に取り組めるよう、特別支援学校のセンター的役割について校内外への周知に努め、地域との連携の強化を図る。	B	・HP、おたよりとも各学部、分掌部で発信を心掛け、HPを見てボランティアに来てくださったり、外部アンケートでよい評価をいただけた。一方、現状では不十分と感じる保護者がいたり、本校のことをよくわからないという方がいたりするので、引き続き努力していく必要がある。 ・地域の関係機関との連携や情報交換など、少しずつ成果は出てきていると思われるが、コロナ禍もあり、センター的役割や組織的な対応等を十分にできないところもあった。	・HPは、スマートフォン等で見ることも意識しながら、内容やレイアウト等を工夫し発信をしていく。 ・本校のことを知っていただく機会として、HP以外のお知らせの方法について、さらに検討し実施していく。 ・センター的役割について、研修やお知らせ等を工夫し、今後も校内外への周知に努める。
	(2) 地域との連携や交流活動に関しての継続可能な在り方の検討	・交流活動においては、コロナ禍の状況を鑑み、実施可能な活動を選択して取り組んだり、実施方法をあらゆる角度から検討して計画したりする。 ・新型コロナウイルス感染症への対策をした上で、同窓会や伸びゆく子どもたちの作品展、PTAバザー等の活動を地域と連携して実施する。 ・関係機関等と連携を深め、理解と協力を得ながら、生徒の進路実現を図る。	B	・交流活動においては、感染症対策を講じながら、直接交流や間接交流（テレビ会議システム・DVDでの紹介・手紙の交換）など実施方法を検討しながら可能な限り再開することができた。 ・PTA活動においては、今年度もコロナウイルスの影響により活動が制限されたが、PTA交流会は地域の感染状況を見ながら、期日を変更して実施できた。同窓会の「成人を祝う会」はソーシャルディスタンスの確保やマイクの消毒等の感染症対策を講じて実施した。伸びゆく子どもたち作品展は校内展示に変更し、展示の様子をHPに掲載して地域への周知を図った。 ・進路相談会や施設見学等を通して、関係機関等と協力し、生徒の進路実現を図ることができたが、小学部段階では保護者アンケートで「わからない」の評価も多くあり、取り組みを十分に伝えられていないところもあった。	・今後も新型コロナウイルス感染症の状況を把握し、可能な感染症対策をとりながら、活動の実施方法を検討して柔軟に対応していく。 ・校外学習や遠足等、学校を中心とする地域との関わりを通して、小学部段階から積極的に様々な関係機関等とつながりを持ち、児童生徒の進路指導の充実を図るとともに、懇談等の機会に取組について積極的に発信し保護者の進路意識の啓発・向上を図る。